

## 特集「オノマトペの利活用」にあたって

小松 孝徳

(明治大学 総合数理学部)

擬音語・擬態語などの総称であるオノマトペは、任意の対象の音の響きやその状態などを感覚的に表現したものであるため、一般語彙と比べると臨場感に溢れ、繊細な表現を可能としているという特徴があるといわれています。このようなオノマトペは特に近年、認知科学や心理学の分野において言語発達や原初言語との関連、表現としての普遍性・特殊性などといったトピックにて盛んに研究されています。

その一方で、「日常的に使われているなじみ深い素朴な表現」としてのオノマトペとしての側面も注目されつつあります。例えば、オノマトペには、ユーザが抱いた「表現したいけれども表現しきれないモヤモヤとしたイメージ」といった「曖昧な意図」が含まれているとも指摘されています。つまり、オノマトペをシステムの入出力に使用することで、システムに対峙したユーザへの操作支援や認知的負荷の軽減が実現できるとも考えられます。

2011年より3年間にわたって開催してきた人工知能学会全国大会のオーガナイズドセッション「オノマトペの利活用」においては、「オノマトペという非常に興味深い表現をどのように活用していくべきなのか」という問題意識のもと、ユーザインタフェース、データベース、認知科学、音声情報処理、言語学などさまざまな分野の研究者の方々による活発な議論を行うことで、オノマトペという表現のもつ可能性について再確認することができました。

そこで本特集号ではこのような議論の集大成として、さまざまな研究分野で進められている「オノマトペの利活用」に関する論文を募集することとしました。そして幸いなことに、合計20件もの論文の投稿をいただくことができました。これら20件の論文が扱うテーマは非常に幅広く、味覚、触覚、筆跡といった人間の感覚にフォーカスしたもの、日本語学習や教育への応用といった言語学を背景としたもの、ロボット、自然言語処理、データベースなどの工学的な分野での応用例を紹介したもの、そして臨床心理の現場での実践例を報告したもの

といったように、研究分野の壁を軽々と超越した意欲的な論文が投稿されました。

そしてこの20件の投稿のうち、特集論文編集委員会での審議によって、16件の論文を採択することを決定いたしました。なお本特集論文においては、「記述している内容に客観性を損ねる重大な瑕疵がない限り、できるだけ多くの論文を採録しよう」というポリシーのもとで編集作業を行いました（注：言うまでもなく、原著論文としてのクオリティが担保されていることが絶対条件ですが）。なぜなら、さまざまな分野の意欲ある研究者が集える「オノマトペの利活用」という場を確立するためには、その多様性を尊重することがまず重要だと考えたからです。さまざまなスタンスに根差した多種多様な論文を本特集論文から発信することで、「オノマトペの利活用」に関する議論がさまざまな研究分野にて活性化していくことを心から期待しています。

今後、「オノマトペの利活用」に関する研究はどこに向かうのでしょうか。この論文特集に目を通していただいた方からの反応を貪欲に取り入れながら、さらなる展開を模索していこうと考えています。今後の「オノマトペの利活用」研究の動向に、ぜひともご期待をいただければと思います。

最後になりましたが、本特集論文に対して査読をいただいた匿名の査読者の方々、進捗状況についての的確な助言をいただいた人工知能学会事務局の皆様には謝意を表して、特集論文の巻頭言とさせていただきます。

### 「オノマトペの利活用」

特集論文編集委員会（以下、敬称略）

編集委員長：小松孝徳（明大）

編集幹事：中村聡史（明大）、松下光範（関大）

編集委員：岩佐和典（就実大）、加納正芳（中京大）、清河幸子（名大）、坂本真樹（電通大）、中村剛士（名工大）、橋本喜代太（大阪府大）、平田佐智子（明大）、渡辺知恵美（筑波大）、渡邊淳司（NTT-CS 研）